

## 花笠の素晴らしさ伝えたい

山形県花笠協議会舞踊指導員会会長  
まつひろ  
藤間 松廣さん



山形花笠まつりの季節がやってまいりました。胸がわくわくするのは、根っからの祭り好きということでしょうが、今年は責任の重さをかみしめ、身が引き締まる思いであります。

私がパレードに参加したのは1963(昭和38)年の第1回目からです。母の実家が老舗料亭「四山楼」ということもあって日本舞踊にかかわりが深く、物心着いたときには藤蔭竹枝先生の所でお稽古しておりました。先生は若柳吉佑政、若柳秀宝、そして花柳衛優先生とともに山形県の舞踊界のとりまとめ役として、花笠まつりの踊りの振り付け統一に力を尽くされました。そんなこともあって「泉ちゃん(私の本名)も踊りなさい」とパレードの輪に入れられたのです。ものすごい人の数と歓声に驚いたことを思い出します。以来、花笠舞踊団の1人として踊り、舞踊指導員として微力ながら踊りの普及に努めてまいりました。

年を重ねるごとに深く心に刻まれるのは、花笠まつりを創り上げた方々の情熱とひたむきさです。新しい振り付けと、新しい歌詞の録音が出来

上がったのは本番1カ月ほど前。それから各派の指導者に教え、同時に先生方は手分けして各地区、各職場を訪れて手ほどきしたのです。「公民館や運動場、会社の玄関前で、無謀とも思える短い期間でよく覚えてくれたものだとただただ驚くばかり。本番では道路に今にも流れ出るように観客が膨れ上がり、県庁に着いたときには感激で涙がとまらなかった」と衛優先生は当時を懐かしく思い出されていていらっしゃいます。思えばとても勢いのある時代だったのでしょうか。ですから、まつりを創るために大勢の大人が一つのことに「こうしよう、こうすれば」と夢中になってかかわることができたのかも知れません。

花笠まつりは今年で52回目となります。冒頭「責任の重さを感じている」と書きましたが、それには2つの理由があります。一つは若柳由美香先生の後を受けて県花笠協議会舞踊指導員会会長をおおせつかったことです。昭和45年の大阪での万国博覧会で披露した花笠が大評判となり、そのことを機に日舞各流派の先生方が集まって、舞踊指導員会が発足しました。以来、花笠まつりのみならず国内外で山形県の観光大使としての役割を務めておりますし、東日本大震災被災地で被災された方々に、少しでも笑顔と元気をと現地で催される復興祭にも参加しております。未熟ではありますが精一杯務めなければ、と決意を新たにしているところです。

もう一つは先日の東北六魂祭での感動です。山形での開催とあって花笠舞踊団はじめ9つの団体総勢400人が、「チーム山形」を合言葉に合同練習を行い、その日に備えました。広いパレード会場、沿道にはこれまで目にしたこともないような大観衆。それぞれの個性を生かしながら、全体としてまとまった踊りを披露することができました。そして気が付いてみたら、私たちが観客の方々から元気を与えられていたのです。

藤蔭先生の縁で月に1回上京し藤間松寿郎師の教えを受けました。お供で歌舞伎を観る機会がありましたが、舞台を見終えて先生はおっしゃいました。「若い時は元気なばかりで芝居としてはまだまだ。踊りも歌舞伎と同じ。本当の味わいが出てくるのは60歳を超えてからだよ」と。

どこまでやれるのか不安ではありますが、まつりを創った先輩方の情熱を思い起こし、花柳優美津さん、若柳一慶さんの力をお借りして花笠の素晴らしさを後輩たちにつないでいきたい、と思っています。